

新潟日独協会

40年の歩み

Schritte in die Zukunft

40 Jahre Japanisch-Deutsche Gesellschaft NIIGATA

新潟日独協会

40年の歩み

Schritte in die Zukunft

40 Jahre Japanisch-Deutsche Gesellschaft NIIGATA

はじめに

新潟日独協会会長
渡辺 隆

新潟日独協会は1977年に新潟市内で発会式を行いました。創立40年を機に記念誌を編もうという声から上がり、記録を残そうということで一致しました。しかし、初期の資料が少ないことなどもあり、編集作業に取りかかるのが先送りになってきたという経緯があります。ようやくこのような形で記念冊子をまとめることができました。

県内の国際交流団体の中でも長い歴史をつないできた新潟日独協会は、新潟大学のドイツ留学経験者を中心にスタートしました。大学関係者中心から民間色を強め、女性が増えていくなか、会の姿も少しずつ変わりながら今日に至っています。今後の課題はさらに交流の輪を広げ、ドイツとの絆を強めていくことに尽きます。これはさまざまな分野で若い世代が日独交流で新たな試みに挑戦している様子を見れば、心強い限りです。

地方と大都市では国際交流をめぐる事情は確かに異なります。新潟はどちらかといえば日本海を挟んだ北東アジアとの関係を戦略的に深めてきたといえます。しかし、グローバル化、国際化は不可逆的にますます大きな流れとなっています。地方都市ならではの各国との交流は、その地方の顔が見える個性的なものへと進化し、これまで以上に多岐にわたっていくはずです。

新潟港は開港五港の一つであり、日本海側で唯一の開港場となった新潟市にドイツ領事館があったことは「新潟県史」などに記されてきました。しかし1人の領事が13年という長い期間にわたってドイツ政府へ公務報告書を送っていたことや領事館跡地が特定されるなど、詳しい事実が会員の手で明らかになりました。それを機にドイツ領事館跡地に記念碑を建てることを決めました。市民、県民などから浄財を募るとするのは初めての経験です。ご支援をいただいた方にあらためて感謝申し上げます。

信濃川の河口にある新潟市は港町として長い歴史を刻んできました。湊とも書くところは水産にかかわる営みの活気あふれる場とともに、人が行き交う賑わいの場でもあります。記念碑は国際交流を通じた発展の可能性を象徴しています。

かつて協会は2年ほど休会に追い込まれた時期がありました。協会の運営は楽な道ではありませんでした。苦労を重ねながらドイツとの交流をはじめ、会員間の親睦などに尽力された方に感謝するとともに、協会の歴史を知ることによって若い世代がより強固な交流の基盤を築く願いを込めて冊子をまとめました。多くの方が新潟日独協会への理解を一層深めていただければ、望外の幸せです。

新潟日独協会40年の歩み

目次

I はじめに	3
II 座談会	
「ゲリラ」から協会へ	8
祖国と新潟を愛して ヨゼフ・ノツオン神父	13
III 活動	
ようこそ 青年部へ!	16
和田直樹 16 / Jan Henryk 18 / Dr. des. Karina Iwe 19 / 工藤諒大 22 / 小林拓朗 22	
「音楽の愉しみ」をつなぐ楽しさ	江畑 徹 23
音楽コラム 20歳にも聴いてほしい『冬の旅』と『水車小屋の娘』	栄長 敬子 25
歌曲とシュラーガーで新たな世界	斉藤 晴海 26
「春の歓び」に共感	平野 佳恵 27
日独ゼミナール ハード・ヘビイ・シリアス路線に	江畑 徹 28
2016年からの主な記録	30
新潟ドイツ映画祭を始める	井上 経久 31
IV 「私とドイツ」	
定着してきた「夏の学校」	佐藤 孝 36
ドイツ旅行 ―ヤパノロジーを抱いて―	小林 昌二 39
箏・尺八 デュオリサイタル ボックホルト氏と共に	杉浦 順子 41
歌、オートバイ、そしてラジオ講座	伊藤 聡 44
入会したころのこと	桑原ヒサ子 47
韓国通がなんで	桑原 孝志 48
金融・証券界の小僧の神様	江畑 徹 50
老後はビール大国に移住?	和田 直樹 52
私の協会とのつきあい	青柳 正俊 54
パキスタンからドイツへ	栗原 道平 56
西に向けた窓	坂井 康一 59
忘れられない人たち	渡辺 隆 62
望郷の念を抱きながら / 真壁禄郎氏 62	
雪国の暮らしを独訳、そして英訳 / ローゼ・レッサさん 64	
稀覯本を集めた情熱 / 原田新司氏 65	
協会関連の主な出来事	67
新潟ドイツ領事館跡記念碑	73
編集後記	77

座談会

新潟日独協会の草創期について、当時のことを語る人も少なくなかった。それだけに、可能な限りの記録をとどめておきたい。協会創立前後のことを中心に小島健一、小田良彦、ヴォルフガング・ボックホルトの3氏に語り合ってもらった。進行は会長の渡辺隆。



「ゲリラ」から協会へ



—1977年に協会は設立されました。5月26日で、当時の新潟日報がにぎやかな様子を伝えています。どんな思いでこの設立総会を迎えたのでしょうか。

小田 設立総会では、ドイツの留学から帰っていた私はまだ大学にいて、受付をしていたので様子はよく覚えているのですが、新潟駅前に当時は厚生年金会館というのがあった。そこが設立総会、発会式の会場で非常に多くの方が来られたと記憶しています。私は300人くらいだったと思っていましたが、どう考えてもそんなに多くないので150人くらいだったのでしょうか。

小島 それくらいでしょうか。会員は300人はいたのですが、発会式では新潟商工会議所、青年会議所の人も多く来られ、発起人にもその多くのメンバーの方からなってもらいました。来賓では当時の知事だった君健男氏の夫人に来ていただきました。設立に向けては最初の専務理事となる斎藤博先生（当時法学部教授、東京在住）に頑張っていたいただきました。

—盛会だったようですね。

小田 最初の日独協会会長は新大の北村学長さんだったでしょう。

小島 ええ、当時の学長の北村四郎さんで、次に学長が替わって猪初男さんが協会長に就かれたはず。新潟大学のドイツ留学経験者が中心だったことは確かです。設立総会ではなにか特別講演とか、特段のものがあったという記憶はないですね。ドイツ大使館からどなたかが来られたのでしたかね。

ボックホルト 私も設立総会には出ました。はじめは協会ができるかなと疑問に思ったことがあります。私は当時新潟大学の大学院に学んでいて、協会設立に向けてはドイツ政府の援助が必要だと考えました。ドイツ大使館とかに支援をお願いするなど、いろいろ動いた覚えがあります。設立総会ではたしか大使館の文化担当の参事官に頼んで来てもらったと思います。この参事官を通じて大使館の援助を受けながらいろいろ手続きしました。調整しました。ドイツ政府も支援のメッセージを伝えてくれました。

—そのドイツ政府の支援の内容はどんなものだったのですか。

小島 お金による支援という性格のものではなく、各地の協会の動きなどを新潟に伝えるとかいろいろ教えてくれました。各地の協会の人などを大使館が招いて、私は3回くらい行きましたか。

小田 全国大会も開かれましたから、そのときに私も行きました。今も続いていますよね。

—新大が、協会会長を引き受ける形でスタートしたのですか。

小田 そうですね。協会の会長は初代、2代と新大が会長を引き受けて、そして3代目に学長以外で初めてドイツ語辞典(相良守峯編集の大独話辞典)の執筆者でもあった野本祥治先生が会長に就いたのだと思います。ドイツと関係の深い協会長という意味では野本さんが初めて、それも学長以外からの選出でした。新大、それも医学部、法学部中心の協会の構成だったのではないのでしょうか。最初の専務理事の斎藤さんが長く務

められました。斎藤さんが筑波大に移られたのを機に私が専務理事を引き継いだのです。
—協会創立後の活動の中心は総会、クリスマス例会だったのでしょね。

小島 そうですね。理事会でも最初の会合はなんとか開けても、その後の理事会など、集まりが悪くてあまり開けなかったことも多かったのです。例会・総会、クリスマス例会の2回を定期会合として開くことにしました。講演会などもやりました。作家の中野孝次さん、ドイツ大使を務めた木村敬三さんら呼びました。会報の発行も仕事でした。一方、年に1回の総会も開けないときもありました。会員の名簿を製本したのは3回あります。2001年、05年のものは手元にあります、その前に緑色の表紙のものがあったのですが、それが今は見つからない。最初の専務理事の斎藤博さんが作ったものがあるはずなんで、それを見ればもう少し詳しい話ができるような気がします。協会の運営は大変な仕事でしたが、スタート時には活発な動きをしていたのは確かです。35社を超える法人会員がいましたからね。

小田 いつ、何をやったのかはよく分からないですね。もうよく覚えていないのが本当です。最初の頃を思い出せば、会は毎月やれとか幹事は持ち回りでやれとか。講演は法人会員の社長にやらせようとか。ところが、300人いた会員がだんだん減少するわけでしょう。新大でも学部が異なると来ない人が増えたりしたわけです。医学部中心で面白くないなあ、なんて声が聞こえてくる。

—会の運営で苦勞されたわけですね。それでも協会設立10周年記念式典が開かれています。当時の写真の日付を見ると1988年6月7日です。当時新潟市長の若杉元喜氏などを大使が表敬訪問している。



日独協会の設立のころについて話し合う。左から小田良彦、小島健一、ボックホルトの各氏（新潟市にある事務局・信濃川ウォーターシャトルで）

小田 10周年記念式典ですか。パーティーを市内のホテルで開きました。写真を見ると二次会に高級料亭まで行っているよ。芸妓さんも呼んでいるんだなあ。懐かしいですね。つまらん話ですが、招宴の費用はどうしたのだろうか。



ドイツ大使を招いて開かれた創立10周年記念式典（新潟市内のホテル）

小島 当時のハリアー・ドイツ大使と参事官が来られた。大使は確か三条市を訪れてから新潟市に来たという記憶があります。それから式典の翌日、大使を私が佐渡に案内しました。その日のうちに大使は帰るという日程でした。一般的なコースで能舞台などを見学されました。

—その後休会状態になっていきます。

小島 良心の呵責に悩むところもありますね。会報発行も滞りがちになりますし、講演会の要旨をまとめようにも仕事もあり、それがだんだん私ではできなくなっていくようになる。定年もあって後継者探しをしていくことになるのですが、手を挙げてくれといってもなかなか出てこない。それから事実上休会となっていきます。

小田 2年ほどの休会の後、小島さんの後に私が専務理事を引き受けることになったのですが、歴代会長が男ばかりでしょう。これではだめだと私は思って関妙子さん、関昭一・元副知事夫人に会長を頼んだ。それで会の活動が再開したわけです。

—女性が増え、民間色が濃くなっていくなか、小田さんが会長になって以降今に至るまでその流れがだんだん強まってきていることはわかります。

小田 関夫人が2期4年やられて、その後新たな体制をどうするかということで、それで新潟市内のホテルで、会長ら役員を引き受ける人を探そうと15人ほど呼んで相談したことがありました。そしたら私、小田に会長をやれということになったのです。

—ところで話は戻りますが、会の発足の土台となったのはドイツ人神父が開いた会話教室だったと聞きます。

小田 新発田市のカトリック教会にヨゼフ・ノツオンさんという神父が新潟市で会話教室を開いていて、「協会をつくろう、つくろう」、と熱心だったのです。大学で顔を会わせるたびに、ノツオンさんから「協会どうなった」と言われましてね。

小島 カトリックの神父として中国を経由して日本に派遣された。戦後の中国の宗教事情もあってか、あまりいい経験でなかったことを語っていました。毎週火曜に新発田市から新潟に神父が来られてドイツ語会話の場ができた。協会の発足からおよそ10年前から始まったのです。最初の会場は新潟市内のカトリック教会でした。でも、会話教室に集まるのは5人くらい。旧制高校の私の同級生なんかもいきました。

小田 その後あちこち場所が変わったので「ゲリラグルッペ」という私が名付けた期間があります。まあ、簡単に言うと新潟市の教会を追われてしまったのではないかな。ノツオンさんはカトリックの信者になれとか言わない人で、信者がなかなか増えないわけです。それが本当の理由かどうかは分かりませんよ。でも新潟の教会の神父さんは厳しい人で、それで新潟市のカトリック教会は使わなくなったということは考えられます。会場を転々とするようになる期間があって、それでも続けたわけです。喫茶店に行ったり、我が家に来たりしたこともありました。最後は小島先生がいた新潟医療技術短期大学部（当時）の応接室になったのです。みんなでドイツに行こうなどと元気だったですね。

—ゲリラグルッペが協会につながったのですね。

ボックホルト 私も誘われて会話サークルにも出ました。ドイツと関係している人の集まりは大切に、ノツオン神父さんは新発田から来て、夕方から会話教室を行って、それからその日のうちに遅くなくても新発田に帰っていきました。

小島 熱心で温厚な方でした。新潟大学でも講師を務められたのではないですか。

小田 会話教室で私がノツオンさんに対し中国を擁護する発言をすると、まあチャンチャンバラバラでね。いい会話の勉強になりました。

—ボックホルトさんはもちろんドイツ語ができるわけですけど。

ボックホルト 私は1976年から79年まで新潟大学の大学院で博士号のための勉強をしたのです。さきほど言いましたように、ちょうど協会の発足の時なのですが、会話の会にもほぼ毎回顔を出しましたね。ドイツ人としてはノツオンさんと私の二人がいた時期があることになりますね。いろいろ話をしました。カトリックと中国の関係の話が出ていましたが、私が禅宗に興味を持っていることを話すと、それを肯定的に聞いてくれていました。それが神父のいいところで、いろんな分野の話ができる人でした。

小島 包容力があつた方でした。生まれがシュレージエン（シレジア）で今はポーランド領です。いわゆる「ハイマートロス（故郷を失った人）」の方というべきなのでしょう。それで今はもう事情が変わっていますから、一度故郷に帰ったらどうですかと何回か言ったことがありますし、小田先生も勧めたことがあるのです。

ボックホルト 神父が帰らずに、新発田市を墓地にした気持ちはよく分かります。シュレージエンはポーランドの中のドイツ領で難民として入ってきた人が多かった。中途半端な立場だったのです。神父にとってハイマートロスというのはよく分かります。生まれた町は今はポーランドですけど、生まれた時はドイツ人ですから、ドイツ系ドイツ人というのも変ですけど。

—皆さんの若い時代を想像しながら元気がわきました。これからの協会のあり方、若い世代に送るメッセージは。

小田 長岡市は交流が形になっているように見えます。それに比べると新潟市は姉妹都市もありませんね。この日独協会ができた後に新潟市役所の国際交流課に行って、姉妹都市の提携をしたいことを伝えたことがあります。当時の課長からは市議会が関心を持ってもらえるとは思えないとの返事でした。そのときですね、韓国の釜山を例に

挙げて、そういうところならいいのですが、と言われ、腹を立てて帰ってきたことを覚えています。ドイツはあまり女性に人気がないのかなあ。それもあって尻すぼみになってきてしまった。ドイツワインでなくて、フランスワイン。姉妹都市ではトリアー、バンベルクと話を進めようとしたことがありました。長岡はトリアーと提携を結んでいますね。当時の市長が音楽好きで、そしてドイツが好きになったと聞きます。新潟には姉妹都市提携もなく、残念だな。これが今後の課題になってほしい。

ボックホルト 姉妹都市は大切ですよ。私は昨年からアウクスブルク(ミュンヘン近く)やその近隣の地域の独日協会の会長をしています。姉妹都市の実現に向けて、私も力になりたいですね。新潟の青年がドイツで何かをしている、行きたいなどというケースがあったら手伝っていきたい。ドイツでも各都市・地域で独日協会があります。共通しているのは会員が高齢化していることです。ただ、私のアウクスブルクでは青年部が活躍しているのです。私もその活動に参加しているのです。大学生もいます。新潟の日独協会の若い人との交流もできるといいですね。

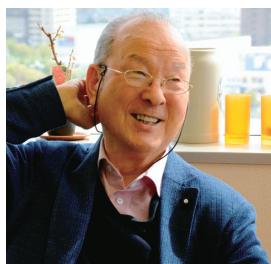
定期的な交流では、新潟大学工学部とマグデブルク大学が留学生の交換事業を続けています。

小島 国際交流団体の運営は大変な仕事なので、これまでの経験で言えば若い人で熱心な人がこのような会には絶対に必要なのです。私たちも若い力があつたからこそできたのでしょね。



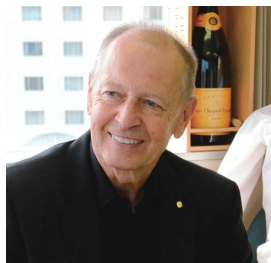
小島健一（こじま・けんいち）

1929年新潟市生まれ。58年新潟大学医学部卒業。63年同大学院修了。64～66年フライブルク大学医学部にフンボルト財団の給費により留学。68年新大医学部附属病院輸血部講師。75年新潟大学医療技術短期大学部教授を経て94年新潟県赤十字血液センター所長。2000年3月退職。この間、パキスタン、スリランカでJICA（国際協力機構）の活動にも従事。新大名誉教授。医学博士



小田良彦（おだ・よしひこ）

1935年、村上市（当時岩船朝日村）生まれ。62年新潟大学医学部卒業。66年同大学院修了。69～72年までマインツ大学小児科助手。帰国後新潟大学小児科助手を経て新潟市民病院小児科部長、新生児医療センター長。2000年副院長で退職後、新潟市の竹山病院院長。現在は「おだキッズクリニック」院長。医学博士。新潟日独協会会長を経て顧問



ヴォルフガング・ボックホルト

1943年ドイツ・アウクスブルク市生まれ。ギムナジウム卒業後、軍隊入り。空挺団、レンジャー特殊訓練などを経験。ミュンヘン大学で東洋文化史学、日本文化史学を学び修士、博士。同大助教授。新潟大学と南京大学に留学。外務省に入り、東亜担当。北京大使館、東京ドイツ大使館に勤務。2008年退職。現在はアウクスブルク、シュヴァーベン独日協会会長、アウクスブルク独中協会顧問、ドイツ情報部フォーラム理事、ドイツ落下傘兵連盟バイエルン州会長。新潟日独協会顧問。安全政策、東亜に関する講義やセミナー、コンサルティングを手がける。糸東流空手初段。尺八奏者。日本の旭日中綬章、モンゴル共和国からアルダル勲章。ドイツでは一等行政長官、陸軍中佐

祖国と新潟を愛して ヨゼフ・ノツオン神父

新潟日独協会の礎を築いてくれたのは、新発田カトリック教会の神父だったヨゼフ・ノツオンさんである。この冊子の草創期の思い出を語り合う座談会でも触れられているように、新潟とドイツの関係を強くしようという神父の情熱がなければ、当協会の設立は少なくとも遅れていたことは間違いない。その温かく高潔な人柄は協会のメンバーにとどまらず、多くの人に慕われた。

神父は1908年、現在はポーランド領のスホロナに生まれた。スホロナは複雑な歴史を抱えるシュレージエン（シレジア）の地にある町である。支配する国も変わり、オーデル・ナイセ線でポーランド領として確定したのは戦後のことだ。座談会のなかで神父による会話教室のメンバーが帰郷を何回か勧めたという話が出てくる。しかし、一度も帰ろうとはしなかった。ドイツの統一を願いながらも、家族のことはあまり語ろうとしなかったという。

ドイツ語の会話教室を開くのに熱心だったのは、一人でも多くのメンバーをドイツに送りたいからだともしられる。望郷の念はひとしおであったはずだ。その思いを私たち協会員に託したともいえる。祖国を愛し、そして新潟を愛した。

ノツオン神父は新発田教会の聖堂建設に力を尽くしたことで知られる。自ら聖堂建築のための資金集めに奔走した。そして友人の米国人篤志家による寄付を



新発田市の五十公野公園にあるノツオン神父の墓碑。新発田が生まれ故郷であるかのような生涯だった

基に、チェコ出身の著名な建築家であるアントニン・レーモンド氏による設計で造られた。新発田に来るには不便な時代に東京からレーモンド氏はやってきた。神父没後に編まれた冊子「宣教師ノツオン神父様に捧げる言葉」で新発田建設社長（当時）の渡辺幸二郎氏が「田舎の小さな聖堂のために自ら何度も足を運んだのは、手がけた聖堂を完璧にしたいという熱意とともに、ノツオン氏に対する彼の尊敬の現れであったと思う」と書いている。その通りだろう。

1987年6月、新潟市の新潟教会の告解室の前で倒れた。「新発田を最後の場所にしたい」と生前から語っていた。希望通りに今は新発田市民の憩いの場である五十公野公園にあるカトリック墓苑の一角に眠っている。その墓碑には穏やかな神父の顔と詩篇の一節が刻まれている。



活動

協会は例会や総会のほか、講演会、ドイツ語会話教室、コンサートなどさまざまな催しを主催し、あるいは後援、協力してきた。この項では4つの活動を紹介する。協会の伝統を引き継ぎながら、新たな芽が育っている。

